

## 現代宗学への自己批判

安 永 辨 哲

(本稿は昨年度大会の拙論Ⅱ大崎学报一三二号八八頁Ⅱを前提として論述するものである)

私は現代の宗派仏教は牢名主的信仰に弱点があると指摘したい。牢獄内に於ては絶対的權威を以て囚徒に君臨するが一步牢舎を離れると全く無力となる。何故?それは虚構の權威に胡坐をかいていたにすぎないからである。宗派信仰も亦宗派内だけにしか通用しない信仰だとしたら、どこかに教学上の虚構性が内包されているからであろう。この点本宗も亦例外ではない。

(一)、いかなる宗の元祖でも末葉でもないと言言された大上人を、日蓮宗という名に於て背て一宗派の祖師に祭りあげ、強いて牢名主たらしめているとしたら、四海婦妙の大願に反することは明かである。況んや法華経を一宗門の専有經典の如く印象づけているとしたら、ことは更に重大といわねばならない。

(二)、妙経は独り日本國のために遣されたものでも、將

又単に全人類の救済のためだけに説かれたものでもない。後五百才に広宣流布せよと命ぜられた仏陀の眞の御本懷は「法輪の一大転換」のためにこそ在ったのである。それが無量義経の「帰命法輪転以時」(德行品)の御眞意であろう。(転法輪に非ず)

(三)、仏が転法輪し給うとき衆生に随順して種々に法を説かれたのが随他意の説と呼ばれる所以であり、即方便權化の教に他ならない。然しそれは恒に如来証得の眞如実相の深義(即随自意の実説)を体信せしめんが爲の設化であった。「凡夫の法と仏法」とは二者共に虚無寂莫にして但仮号のみⅡ經集部卷十二Ⅱの經文の明証のとおり、仏法とは凡夫の法即世法と相即相入の關係にあり、当然文辭語言の相をからねば衆生誘引の途は開かれぬのだから随他意方便の權教という他はない。これに対し随自意眞実の教を妙経では如来法と宣示し給うも、それは言辭の相寂滅唯仏与仏の境界であるから四十余年如来の胸中に秘して顯説されなかつた。これを「仏所念ノ法」として未顯眞実と示されたのである。涅槃經に隨他意、隨自意の他、隨自他意の説とあるは、妙経には仏法・如来法及び世尊法の語しか見当たらないことを重ねて指摘しておきたい。

四、本来一切の宗教は個々の人間の苦惱を救済せんとするがその役割であり、仏教も亦同断である。「一切衆生の異の苦を受くるは如来一人の苦なり」（涅槃經）とある通りであるが大上人はこれを承けて「一切衆生の同一の苦を受くるは日蓮一人の苦なり」といわれている。それは一般諸宗教の個人救済の次元に<sup>とくら</sup>ける限り、人と人、国と国、民族と民族、宗教と宗教相互の対立を超越することはできない。これら一切の対立観を超越してこそ眞の平安を地上に顕現し得るのだ。その為に「時代の救済場の救済の原理」としての如来法を示されたのが妙経であり、それには二千年の時間が必要だとして個人救済の原理たる仏法は末法に入れば一往その役割を果たしたことを白法隱没と宣示されたのである。即ち二乗以下を目標とする救済の原理としての白法は隱没しても、教菩薩法仏所護念の法華經こそ大白法として当来の闍浮提を光被すべき救済の原理であると宣説（薬王品）されたのが第五の五百才に当って、仏法||白法より如来法||大白法への一大転換を具現せよと命ぜられた無量義經の御真意と拝すべきである。

四、而るに吾等凡夫は顛倒の故に諸法の觀察に當つても常に「是は此れ、是れは彼。是れは得。是れは失」と横計

（憶想妄見）して永劫に苦毒の中に低迷して自力脱出ができないでいる云々」（無量義經説法品）と指摘されている。涅槃經の真知に対する比知、寿命品の不如三界見於三界云々皆な同断であつて、かかる対立的把握が錯謬なる所以を宣明して眞の諸法觀察の要諦を説法品の同上に「菩薩若し一法即無量義の実義を習学せんと欲するなら、諸法は本・來・今性相空寂にして無大無小無生無滅非住非動不進不退恰も虚空の二法なきが如くと觀察すべきである」と教誡されるのである。この比知横計の妄見に樂着するのが万人に共通する根本的苦因である点を同一の苦と叫ばれたものと確信する。権実の相對判も經々の對判でなく、文上隨他意の方便權説と文底隨自意の眞淨實説の相異と拝すべく、したがって前者は自ら白法―仏法―迹門の分際、後者は大白法―如来法―本門の立場と受けとめない限り教学上の幾多の矛盾は解明できないのではないか。学者徒らに博學多識を誇示するのみでは畢に仏智の正要に迫ることはできない。況んや大乘非仏語説を心中に懐きながら仏の金言を云々するは自己欺瞞という他はない。依智不依識の深意を肝に銘じて教学の手直しに邁進して頂きたい。本尊抄結文に何故に不識一念三千者と書かれたか、又仏は常に大慈悲に住し給うも

のなるに、何が故に敢て大慈悲を起してと述べられたのか、諸兄の御教示を仰ぎ得れば幸甚である。以上

## 妙実大覚大僧正事蹟について

中 村 文 三

万代亀鏡録の中の奥聖鑑抜粹（師日典の言葉を弟子日奥が覚書）の一節に、「大覚の御廟所西山のウシクボと云ふ処にあり誰も此の事を知らずと云へり。後に又此事を語られり其の時云はれし事は事を獨麴ひとりまがに問ふと云ふ事あり其の為に是れを申すなりと。又其の後に曰く。彼の廟所のあたりを通りし時其のあたりに草かり居しを見て此の山に廟所石塔などありやと問ひければ中々大人の御堂と云ひてありそこに石塔などありと云ふ。行きて見んと思ひしかども、はや日暮れて行く事ならずして其まま帰りけりと語られけり。」と書き残している。妙願寺二世大僧正ともあろう方の御廟所が①誰れも知らない処になぜあるのか②何故獨麴（しもしもの者）だけ知ってるか

③なぜ龍華三山中になかったのか。等々不審を含む一文である。筆者は昔から京都市民の不受不施派信者の子孫であるから（西山のウシクボ）の所在を先づ探求と思ひ立った。無学の老人は暇に任せて足を運び続ける事早や四年目的の御廟所が未だ探し出せない。余祿として明確で無い大覚の出生に関する諸説が多少的を絞る事が出来そうになった。一妙院日信著「不受不施信仰の手引」立正護法会刊。に依れば、父は関白近衛経忠母は入道右大臣家定の女、永仁五年（一二九七）次男として生れ月光麻呂と命名（別の後醍醐天皇々子説もある）四才の時出家、八才叔父に当る覚実大僧正（一乗院）の下で得度、名を実玄と改め、真言宗の教学を修め若くして嵯峨の大覚寺の門跡として晋山。と云ふ事になっている。十七才（正和二年）のある日洛中で、日像の辻説法を聞いて真言宗と法華宗の違いに感ずるところあり、その後七日間日像につき詳しく教化を受けてお題目の法門をただし大覚寺の門跡を捨てて弟子数名と共に日像の弟子となった。名を妙実と改め、当時祖師日蓮の遺命を奉じて帝都に法華経の法門を打ち立てる為弘法中の日像を助けて遂いに妙実二十五才の時後醍醐帝より、勅願寺妙願寺領を賜り龍華三山の開基を始め洛中に二十一本山を開く礎を